上越教育大学研究紀要　第39巻第１号　令和元年８月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 39(1), Aug. 2019

非行への認識による自己意識特性の違いに関する研究
－大学生を対象とした振り返りを通して－

江　田　昌　希*・稲　垣　応　顕**

（平成31年１月31日受付；平成31年４月23日受理）

要　　旨

本研究の目的は自己意識作用とその内容の両側面から非行生徒を捉え，①彼らの特徴を明らかにすること，また②生徒が非行傾向を増加させるプロセスに示唆を得ることである。本研究では回想法をもとに質問紙調査を実施し，大学生144名(男子108名：女子36名)を分析対象とした。結果，中学生時代に非行傾向を有していた学生はそうでない学生と比べ高い公的自己意識特性・私的自己意識特性を示した。また，彼らは当時，無気力感，共通感覚の欠如，享楽感覚，を強く抱いていたことが示唆された。これらのことから，筆者らは生徒が非行傾向を増加させるプロセスとして，以下のように考察した。彼らは，まず公的及び私的自己意識のそれぞれから喚起される判断と行動などの不一致から社会における自己の異質性(＝共通感覚の欠如)への実感を高める。次に，その認識から勉学や部活といった活動を通した自己実現や一般生徒との交流を諦め(＝無気力感)，自己と同じような社会に馴染めない学生との繋がりをもとうと非行への興味を有するようになる。そして“今その場が楽しければいい”といった感覚(＝享楽感覚)を背景に学校生活ではなく逸脱した友人との交流に楽しみを見出し，非行を深化させるということである。

KEY WORDS
Delinquency　非行，　Self-consciousness　自己意識，　University student　大学生，Reminiscence　回想法

１．問題の所在と目的

非行の延長上には社会的に凶悪と認識される犯罪が存在する。例えば，2015年の川崎市中１男子生徒殺害事件，2016年の東松山都幾川河川敷少年殺害事件は記憶に新しい。これらの事件を受けて教育者や研究者は，様々な手法を用いて非行生徒の特徴を明らかにし，それに基づいた立ち直りの手立ての開発に取り組んできた(例 白井ら，2001：安藤，新堂，2013)。しかし，警察庁生活安全局少年課(2018；以下，警察庁)によると，2017年における少年刑法犯の検挙人員は２万6,797人である。また，文部科学省(2017)は，1997－2016年の学校における管理下・管理下以外の暴力行為発生件数と1,000人当たりの割合(以下，暴力行為発生率)を調査し，両汎例とも年々増加傾向にあることを報告している(Fig1)。これらの調査・報告から，非行問題を表す数値が依然高いままであることが窺える。また，従

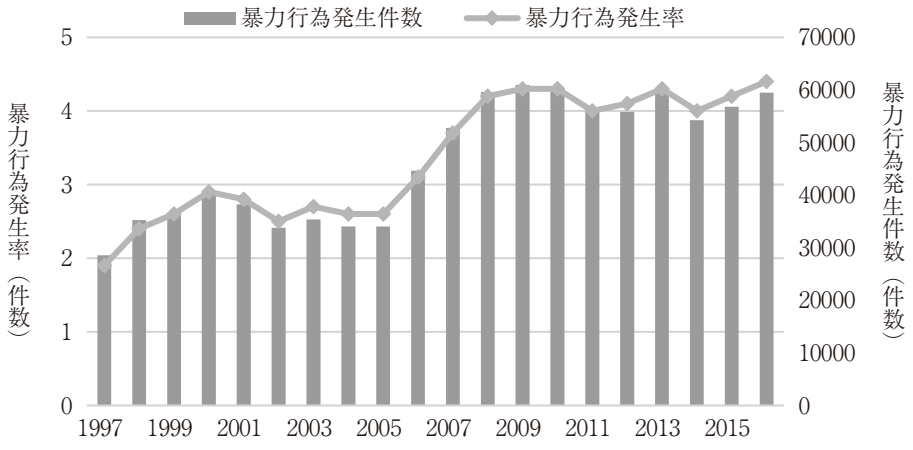

Fig1　学校の管理下・管理下以外における暴力行為発生件数・暴力行為発生率の推移
（資料）『平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(速報値)について』を修正

*修士課程（学校教育学系）　　**学校教育学系

来の非行研究の知見だけでは生徒を非行から立ち直らせることに限界があり，新たな視点を取り入れる必要があると考えられる。

筆者らは，従来の非行研究について自己意識の内容に関する問題が多く取り上げられていると感じている。例えば，金子(2012)は問題生徒の特徴として攻撃性が学校生活関与行動を抑制し，問題行動を促進すると述べている。小保方・無藤(2006)は，夏休み中に非行傾向行為を経験する生徒(以下，開始群)の特徴として，２学期になると学校享受感の低下がみられ逸脱した友人との交流が増えていたと述べている。また，小保方ら(2006)は，同文献で開始群が非行に至るプロセスとして，それらの生徒に抑うつ傾向が認められないことを踏まえ，逸脱した友人との交流に学業や部活といった学校生活以外に楽しみを見出していることを挙げている。しかし，筆者らは自己意識の内容だけでは総合的に非行生徒像を捉えられないと考える。辻(1993)は，注意を向ける自己がパブリックな自己若しくはプライベートな自己かの違いにより生じる心的過程はそれぞれ異なると述べている。例えば，Froming, WJ., Walker, G.R., & Lopyan, K, I.(1982)は罰に対する自分の個人的な意見と多数意見が異なると考えている被験者に，学習で誤反応した他者に罰を加えるという役割を与え，個人的な意見(私的な基準)に従うか，または多数意見(社会的基準)に従うかの同調実験を行った。結果，彼らは私的自己意識を高められた被験者が私的な基準に従いやすく，公的自己意識を高められた被験者は社会的基準に従った行動をとる傾向にあると報告している(Froming, WJ., Walker, G.R., & Lopyan, K, I., 1982)。これらの知見から，自己意識作用(自己への注意)とその内容は車の両輪のような関係であると捉えられる。また，非行問題においてもその両側面からの検討が必要であると考えられる。

そこで，本研究では自己意識作用とその内容から非行生徒を捉え，その特徴を明らかにすることを目的とする。また，本研究では把握した特徴から生徒が非行傾向を増長させるプロセスに示唆を得ることを目的とする。

なお，白井ら(2001)は，元非行生徒のなかには「どこへ行っても受け入れてもらえなかった。仲間が欲しい。ひとりぼっちは嫌や。自分の居場所が欲しい。そんな気持ちで私が行き着いたところは暴力団の世界だった」と回顧する者がいたと述べている。また，岡田(2001)は，自分が“グレた”理由について「十歳のころの寂しさが遠い記憶の引き金，そして忙しい母親にかまってほしいというメッセージ。親にふりむいてほしい」などの気持ちを挙げている。これらの報告から，非行生徒が生活のなかで多くの心理的葛藤を体験していることが窺える。

本研究では非行生徒が現在までに感じてきた心理的葛藤を把握するべく生涯臨床心理学の視座に立ち，自己意識の内容として主に臨床的な問題に関連付けられた心理的原因を取り上げる。また，非行生徒にとってより強い心理的葛藤を把握することが可能と思われる回想法を用いる。

2．研究の方法

2.1　調査対象

Ａ県に立地する市立Ｂ大学の理系学部１－４年生149名(男子110名；女子39名)を対象として調査用紙を配布した。そのうち回答に不備がある，または無回答の項目があるものを除く144名分(男子108名；女子36名)を分析対象とした。内訳は１年生71名(男子55名；女子16名)，２年生39名(男子26名；女子13名)，３年生32名(男子25名：女子７名)，４年生２名(男子２名)であった。

2.2　調査手続き

2018年７月に質問紙調査を実施した。調査実施に協力の得られたＢ大学Ｃ教授に質問紙・実施方法の説明を記した書面を郵送し，調査用紙の説明・配布・回収を依頼した。なお，回答は無記名とした。また，調査実施に際して，回答の途中で気分を害した場合は中止してよいこと，結果を統計的に処理する旨等を質問紙の表紙に記入し，倫理的な配慮を行った。

2.3　調査内容

本調査は下記の３つの要素からなる合計33の質問項目で構成した。

2.3.1　非行に対する興味・関心

非行への認識別に学生を分類するため，小保方ら(2006)の「非行傾向行為の経験尺度」を参考に，本研究で独自に作成した６項目を用いた。各非行傾向行為「a)“タバコを吸う”，b)“病気などの理由がないのに学校をサボる”，c)“親に隠れて酒やビールを飲む”，d)“子どもだけで夜遅くまで遊ぶ”，e)“店の品物をお金を払わずに持ってくる”，f)“よその人の自転車を盗んだり，かってに使ったりする”」について「あなたが中学生時代，これらの行為について興味

を感じましたか」という教示文を提示し，“1.全然感じない”から“6.強く感じた”の６件法で回答を求めた。

その理由として，2017年における刑法犯少年全体に占める初発型非行の割合が56.9％であることが挙げられる(警察庁，2018)。初発型非行とは「単純な動機，且つ犯行手段が容易で，結果が軽微な非行」を指す(緑川，1999)。つまり，今日における非行は軽微な犯罪を中心に行われていることが窺える。このことから，本研究では小保方ら(2006)の「非行傾向行為の経験尺度」を参考にした。また，「非行傾向行為の経験尺度」は当該行為に関して経験の“ある”“なし”の２件法により直接的な回答を求めている。そのため，筆者らは回答する学生が本調査をキッカケにネガティブな記憶を思い出すなどの倫理的問題を想定し，少年法第三条第二項が掲げる非行少年に“虞犯少年”が含まれることを踏まえ，「経験の有無」を「興味の有無」と間接的な問いかけに改変した。また，前述の改変は本研究の目的に影響を与えないと判断し，これに従い調査を実施した。加えて，より詳細な回答を得るため，６件法を用いることにした。

2.3.2　自己意識

菅原(1984)の「自意識尺度」を用いた。「以下の項目は，あなたにどの程度あてはまるでしょうか」という教示文のもと“1.全くあてはまらない”から“7.非常にあてはまる”の７件法による回答を求めた。

代表的な自意識尺度には，菅原(1984)のほかに押見・石川・渡辺(1979)や岩淵・田淵・中里・田中(1981)が作成した尺度がある。彼らの尺度に共通する点として，Feningstein(1975)の自意識尺度を日本語訳したことが挙げられる。しかし，当該尺度は非常に抽象度の高い表現が用いられている(菅原,1984)。そのため，これをもとに作成した押見ら(1979)や岩淵ら(1981)の尺度は，日本語としての不自然さや因子構造に問題を残すなどの課題が存在する(堀，2001)。一方，菅原(1984)は独自の立場から自意識尺度の日本語版を作成することを試みており，上述した課題は解決している。そのため，本研究では菅原(1984)の作成した自意識尺度を採用する。

なお，菅原(1984)が作成した自意識尺度は公的自意識(11項目)及び私的自意識(10項目)の２つの下位因子で構成されている。本尺度における内部一貫性を検討することを目的に各々の下位因子に関してCronbachのα係数を求めた。結果，公的自意識が$\alpha=.85$，私的自意識が$\alpha=.75$であった。このことから，筆者らは本尺度における内部一貫性を確認し，高い信頼性を有すると判断した。

2.3.3　教育臨床的な視点による心理的原因

塚野(2004)が挙げた青年期の臨床的な問題に共通する心理的原因(因子と同義)５項目と，藤野(2002)が挙げた鑑別所に入所した少年の「友人との付き合い方」因子のうち１項目を用いた。なお，各項目は気分の変調というバイアスを軽減するため，ポジティブな文章表現に改変した。また，本研究では各調査対象者に非行の好発時期となる中学生時代の回想を促した。そのため，結果を項目ごとで比較しやすいダイヤグラムの各頂点に設定し，中学生時代の心理状態についてダイヤグラムで教えてください」という教示文により回答を求めた。さらに，本研究において“学生”という用語は回想を促した時間軸に沿い“生徒”に変更した。

3．結果と考察

3.1　調査対象者の分類

本研究では，中学生時代に各非行傾向行為に興味がない(“どちらかといえばなかった”“あまりなかった”“まったくなかった”)と回答した学生を一般群に，１つでも興味がある(“どちらかといえばあった”“かなりあった”“強くあった”)と回答した学生を非行傾向群に分類した。結果，非行傾向群が42名，一般群が102名であった(Table1)。本研究における調査対象者の分類において各群の人数に偏り(非行傾向群：一般群 ＝ 1：2.4)が認められる。この偏りについて筆者らは調査対象者の大学での専攻分野・専門性による影響だと考えている。本研究では，平均値と標準偏差(以下，SD)を算出して自己意識上における非行生徒の特徴の検討を試みる。そのため，筆者らは上述の偏りが分析方法に影響を与えないと判断し，この分類に従い以下の分析を行った。

Table1　各群における人数

	一般群	非行傾向群	全体
人数	N=102	N=42	N=144

3.2　各群の自己意識特性

本研究では公的自己意識及び私的自己意識についてそれぞれ尋ねた各項目の得点を単純加算し，その平均値(以

下，公的自己意識得点及び私的自己意識得点）とSDを群ごとに算出した（Table2）。結果，公的自己意識得点において非行傾向群51.4点（SD10.8），一般群48.3点（SD12.3）であった（一般群<非行傾向群）。また，私的自己意識得点において非行傾向群44.7点（SD9.3），一般群42.9点（SD10.9）であった（一般群<非行傾向群）。上述の結果をもとに，非行

Table2　各群の公的及び私的自己意識得点

	公的自己意識得点		私的自己意識得点	
	平均値	SD	平均値	SD
非行傾向群	51.4	(10.8)	44.7	(9.3)
一般群	48.3	(12.3)	42.9	(10.9)

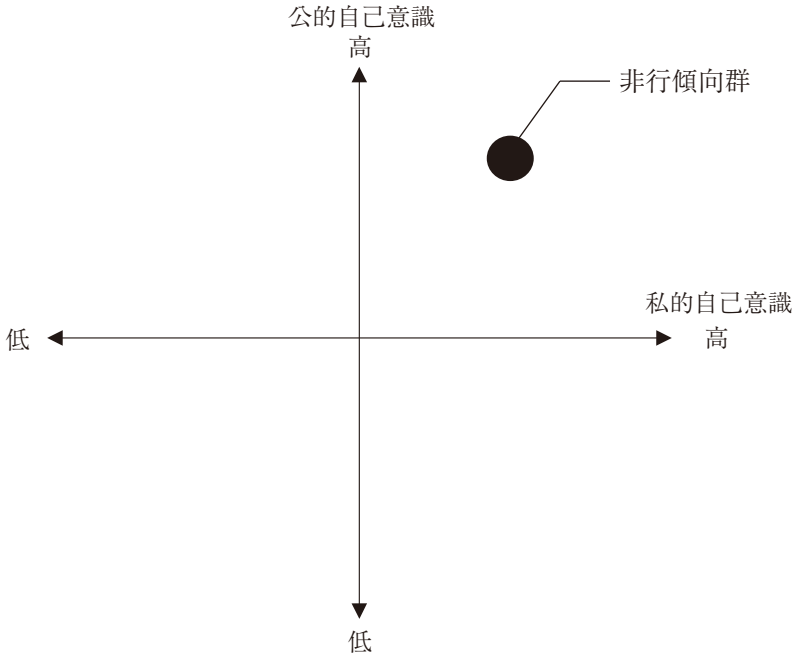

Fig2　自己意識概念図

Table3　菅原（1984）が作成した「自意識尺度」の項目

公的自己意識（11項目）	私的自己意識（10項目）
1.自分が他人にどう思われているのか気になる	1.自分がどんな人間か自覚しようと努めている
2.世間体など気にならない	2.その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい
3.人に会う時どんな風に振る舞えば良いのか気になる	3.自分自身の内心のことにはあまり関心がない
4.自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	4.自分が「本当は何をしたいのか」を考えながら行動する
5.人に見られていると，つい格好をつけてしまう	5.ふと，一歩離れた所から自分を眺めてみることがある
6.自分の容姿を気にする方だ	6.自分を反省してみることが多い
7.自分についての噂に関心がある	7.ら人を見るように自分を眺めてみることがある
8.人前で何かするとき，自分の仕草や姿が気になる	8.しばしば，自分の心理解しようとする
9.ら人からの評価を考えながら行動する	9.常に自分自身を見つめる目を忘れないようにしている
10.初対面の人に，自分の印象を悪くしないように気遣う	10.気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じるほうだ
11.人の目に映る自分の姿に心を配る	

傾向群の自己意識特性上における全体像をより明確にするべく，『公的自己意識(高－低)』『私的自己意識(高－低)』を軸とした平面上に布置した(Fig2)。なお，Fig2における原点に一般群の公的及び私的自己意識得点を用いた。

Fig1の概観から，非行傾向群が一般群と比べ高い公的自己意識特性・私的自己意識特性を有することが窺える。また，菅原(1984)が作成した「自意識尺度」の項目(Table3)を踏まえると，非行傾向群は自己の気分や動機などを重視する傾向があり，内的な心的過程を意識しやすいと考えられる。また彼らは，自分が他者へ与える印象に注意を向ける傾向が強く，自己を社会的対象として意識しやすいことが推察される。本調査の結果では，先行研究とは異なる非行生徒像が示された。櫻庭ら(2001)は，「『援助交際』への態度が寛容な者ほど流行に追従する意識が強く，金銭を最優先に考える傾向が強く，自分以外のことには関心が少なく，寂しさを埋め合わせるために他者への接触を求める傾向が強い」と述べている。また，藤野(2002)は生徒が非行を行う背景に「生真面目なことを言うことで座を白けさせ楽しい気分や雰囲気を損ないたくない」という気持ちの存在することを指摘している。このように，先行研究から推測される非行生徒像は自己の外的側面に向ける注意が低く，気分やその場の気持ちといった内的側面に向ける注意の高いことが窺える。筆者らは本結果と先行研究から得られる非行生徒像の差異について“意識研究の方向性”の影響を考えている。先行研究では櫻庭ら(2001)や藤野(2002)のように“なぜ，生徒は非行にはしるのか”といった視点から非行生徒の内的要因に着目しており，ぬくもり希求や金銭至上主義など自己意識の内容に関する問題が指摘されてきた。そのため，先行研究では私的自己意識が高い，俗に言う“自己チュー(自己の気分やその場の気持ちしか考えない)”な非行生徒像が指摘されてきたと考えられる。一方，本研究は注意を自己のどこに焦点づけるかといった自己意識作用に着目している。そのため，本調査の結果では非行生徒が他者からの評価や親の期待，社会規範にも意識を向けていることが示唆されたと考えられる。

3.3　臨床的な問題に関連付けられた心理的原因

中学生時代における各群の“勤勉性”“居場所感”“共通感覚”“熟慮性”“有能感”“アイデンティティ”の平均値及びSDをそれぞれ算出した(Table4)。結果，非行傾向群は“勤勉性”3.88点(SD1.22)“居場所感”4.24点(SD1.31)“共通感覚”3.69点(SD1.12)“熟慮性”3.31点(SD0.99)“有能感”3.57点(SD1.05)“アイデンティティ”3.64点(SD1.25)であった。また，一般群は“勤勉性”4.34点(SD1.18)“居場所感”4.40点(SD1.17)“共通感覚”4.13点(SD1.04)“熟慮性”3.87点(SD1.15)“有能感”3.83点(SD1.09)“アイデンティティ”3.92点(SD1.25)であった。これらの結果をもとに非行傾向群と一般群との差(以下，b-a値)を求めると“勤勉性”-0.46点“居場所感”-0.16点“共通感覚”-0.44点“熟慮性”-0.56点“有能感”-0.26点“アイデンティティ”-0.28点であった(Table4:Fig3)。このことから，非行傾向群が一般群と比べ当時の自己の心理的状態を低く評定しており，特に“勤勉性”“共通感覚”“熟慮性”の項目が低いことが窺える。本研究における“勤勉性”“共通感覚”は塚野(2006)が挙げた「無気力症」及び「共通感覚の欠如」の概念にそれぞれ依拠し，“勤勉性”を自分が本来しなければならない事柄(勉強や目標等)を自覚し，それを果たそうとする心理状態，一方“共通感覚”を「自分だけではない」「みんな一緒」など，自分と他者が同じ人間であると感じる心理状態と定義した。また，“熟慮性”は藤野(2002)が挙げた享楽の概念に依拠し，楽しさや面白さではなく，時や場所，将来等をしっかり考えた上で計画的・理知的に物事を判断しようとする心理状態と定義した。これらのことから，非行傾向群は中学生時代特に①勉学や部活といった本来学生が果たすべき役目や義務に意義を見いだせず，現実逃避する傾向が強く(以下，無気力感)，②他者が自分と同じ人間だという感覚がもてない(以下，共通感覚の欠如)，③“将来のことを考えるより，今その場が楽しければいい”といった感覚(以下，享楽感覚)を強く有していたことが示唆された。

Table4　臨床的な問題に関連付けられた心理的原因を尋ねた項目の平均値及びSD，b-a値

	一般群(a)		非行傾向群(b)		b-a値
	平均値	SD	平均値	SD	
①勤勉性	4.34	(1.18)	3.88	(1.22)	-0.46
②居場所感	4.40	(1.17)	4.24	(1.31)	-0.16
③共通感覚	4.13	(1.04)	3.69	(1.12)	-0.44
④熟慮性	3.87	(1.15)	3.31	(0.99)	-0.56
⑤有能感	3.83	(1.09)	3.57	(1.05)	-0.26
⑥アイデンティティ	3.92	(1.20)	3.64	(1.25)	-0.28

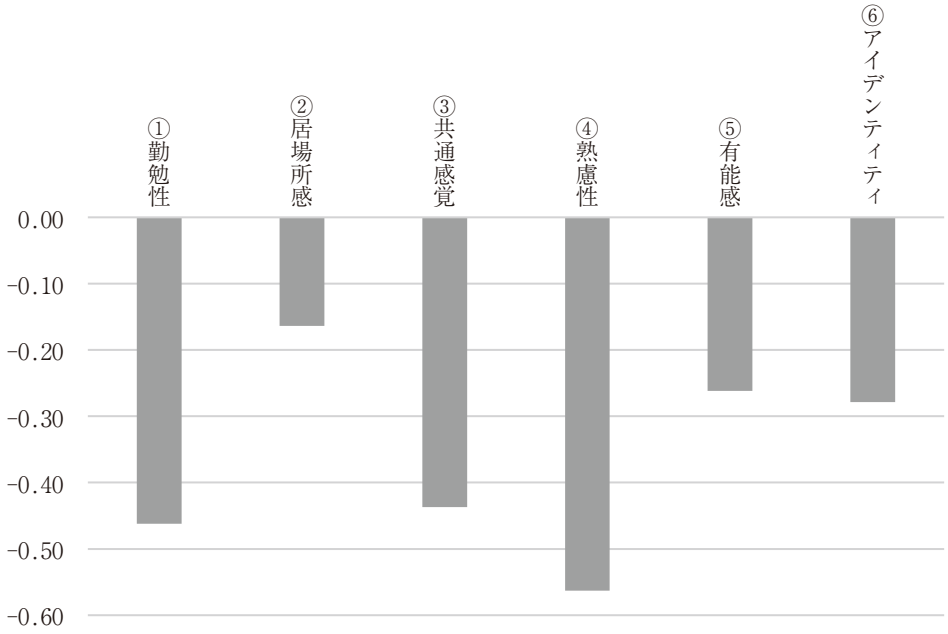

Fig3　臨床的な問題に関連付けられた心理的原因

4．総合的考察と今後の課題

4.1　総合的考察

本研究では自己意識作用とその内容の両側面から非行生徒を捉え，その特徴を明らかにすることを目的とした。そこで本研究は教育臨床心理学の視座を取り入れ，回想法をもとに大学生に質問紙調査を実施した。また，調査は①自己意識特性及び②臨床的な問題に関連付けられた心理的原因の把握を内容とした。

本研究では，非行傾向群が一般群と比べ高い公的自己意識特性・私的自己意識特性を示した。辻(1993)や梶田(1994)によると，人が特定の側面に注意を焦点づけると，それが何であれ，その側面をより明瞭に意識する。そのため，公的自己意識特性の高い者は他者からの視線や評価に敏感に反応し，社会的な基準(社会規範)を強く意識する(例Feinstein, 1979)。社会規範とは社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準であり，規範の形態として公的・外顕的から道徳といった私的・内隠的な基準が含まれる(中島ら，1999)。一方，私的自己意識特性の高い者は感覚・感情・動機・思考・理念などに関してより正確な自己知識を有する(例 Gibbons et al, 1979)。自己知識とは「自己の現在の心的状態についての知識」を指す(日本認知科学会，2002)。このように，高い公的及び私的自己意識特性が明瞭にする側面はともに自己の行動や判断などの基準となるが，両者の質は異なる。すなわち，公的自己意識特性は社会・集団，私的自己意識特性は個の視点で構成された基準を明瞭にする。そのため，それぞれの基準から喚起される行動や判断などは場面によって相容れない場合が想定される。例えば，人の物を盗るのは社会的には犯罪だと知っているが，お金もなくどうしても欲しいからと万引きするといった場面である。これらのことから，非行傾向群は質の異なる２つの基準を内在していることが窺える。また，このような傾向を示す非行傾向群に中学生時代の回想を促した結果，当時の自己の心理的状態を一般群と比べ低く評定しており，特に“勤勉性”“共通感覚”“熟慮性”の項目が低かった。このことから，非行傾向群に分類された学生は中学生時代に①無気力感，②共通感覚の欠如，③享楽感覚を強く有していたと考えられる。これらを踏まえ，筆者らは生徒が非行傾向を増加させるプロセスを以下のように考察した。まず，非行傾向生徒は公的及び私的自己意識特性がそれぞれ明瞭化した基準から喚起させられる行動や判断などの不一致から社会における自己の異質性(共通感覚の欠如)への実感を高める(第Ⅰ期)。次に，彼らはその認識から勉学や部活といった活動を通した自己実現や一般生徒との交流を諦め(無気力感)，自分と同じような社会に馴染めない学生との繋がりをもとうと非行に対する興味を増加させる(第Ⅲ期)。そして，彼らは学校生活ではなく逸脱した友人との交流に楽しみを見出し，“将来のことを考えるより，今その場が楽しければいい”といった感覚(享楽感覚)を背景に非行を深化させると考えられた(第Ⅲ期)。

4.2　今後の課題

本研究の課題として以下の２点を挙げる。

①はじめに調査対象である。本研究では大学生を調査対象者とし，回想法をもとに質問紙調査を実施した。今後可能であれば，現在処遇を受けている生徒を対象に同様の調査を行う必要がある。②次に調査方法である。本研究では質問紙調査のみを実施した。今後，研究の質的内容を深める目的で学生に聞き取り調査などを行う必要がある。

5．引用文献

(1) 安藤有美，新堂研一(2013)．「非行少年における視点取得能力向上プログラムの介入効果－視点取得能力と自己表現スタイルの選好との関連－」

(2) Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A. H.(1975). Public and private self consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and clinical psychology*. 43. pp522-527.

(3) Fenigstein, A.(1979). Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Experimental Social Psychology*. 37. pp75-86.

(4) Froming, WJ., Walker, G. R., & Lopyan, K, I.(1982). Public and private self-awareness: When personal attitudes conflict with societal expectations. *Jornal of Experimental Social Psychology*. 18. pp476-487.

(5) 藤野京子(2002)．「男子非行少年の交友関係の分析」．教育心理学研究．第50巻．pp403-411.

(6) Gibbons, F. X., Carver, C. S., Scheier, M. F., & Hormuyh, S. E.(1979). Self-focused attention and the placedo effect: Fooling some of the people some of the time. *Journal of Experimental Social Psychology*. 15. pp263-274.

(7) 堀洋道(2001)．「心理測定尺度集Ⅰ－人間の内面を探る＜自己・個人内仮定＞－」．サイエンス社．

(8) 岩淵千明，田淵創，中里浩明，田中國夫(1981)．「自己意識尺度についての研究」．日本社会心理学会第22回大会発表論文集．pp37-38.

(9) 梶田叡一(1994)．「自己意識心理学への招待」．有斐閣．

(10) 金子秦之(2012)．「問題行動抑止機能と向学校的行動促進機能としての中学校における生徒指導－一般生徒と問題生徒の比較による生徒指導－」．教育心理学研究．第60巻．pp70-81.

(11) 警察庁生活安全局少年課(2018)．「平成29年における少年非行，児童虐待及び子どもの性被害の状況」．財務省印刷局．

(12) 緑川徹(1999)．「初発型非行－豊かさを生み出す浮遊非行－」．/清水賢二編．「少年非行の世界」．有斐閣．pp36-67.

(13) 文部科学省(2017)．「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(速報値)について」

(14) 中島義明，安藤清志，子安増生，坂野雄二，繁桝算男，立花政夫，箱田裕司(1999)．「心理学辞典」．有斐閣．

(15) 日本認知科学会(2002)．「認知科学辞典」．共立出版．

(16) 小保方晶子，無藤隆(2006)．「中学生の非行傾向行為の先行要因－１学期と２学期の縦断調査から－」．心理学研究．第77巻．pp424-432.

(17) 岡田美里(2001)．「『しあわせ』のかたち－PTSDからの旅立ち－」．講談社．

(18) 押見輝夫，石川直弘，渡辺浪二(1979)．「SCSの検討(その２)」．日本グループダイナミックス学会第27回大会発表論文集．pp29-30.

(19) 櫻庭隆浩，松井豊，福富護，成田健一，上瀬由美子，宇井美代子，菊島充子(2001)．「女子高生における『援助交際』の背景要因」．教育心理学研究．第49巻．pp167-174.

(20) 白井利明，岡本英生，福田研次，栃尾順子，小玉彰二，河野荘子，清水美里，大田貴巳，林幹也，林照子，岡本由美子(2001)．「非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達的研究－ライフストーリーの分析－」．大阪教育大学教育研究所．第36巻．pp41-57.

(21) 菅原健介(1984)．「自己意識尺度日本語版作成の試み」．日本心理学研究．第３巻．pp184-188.

(22) 塚野州一(2004)．「みるよむ生涯臨床心理学－生涯発達とその臨床的対応－」．北大路書房．

(23) 辻平治郎(1993)．「自己意識と他者意識」．北大路書房．

A study on the Special Quality for the Self-Consciousness for Juvenile
− Reflection by University Student −

Masaki EDA* · Masaaki INAGAKI**

ABSTRACT

The purpose of this research is to capture delinquents from both sides of the self-consciousness action and its contents and to clarify them characteristics. In addition, students get suggestions on the process of increasing delinquency. In this study, a questionnaire survey was conducted based on the reminiscence method with 144 college students. The results indicated that, the delinquency tendency showed higher public self-consciousness characteristics and private self-consciousness characteristics than the general group, It seems that two different criteria of quality are mixed in the delinquency tendency group, or it was suggested that it was embraced strongly in junior high school students, student apathy, lack of common feeling, sensation of seeking pleasure. Based on these facts, the authors considered the process of increasing students' delinquency tendency as follows: First, from the discrepancies of judgments and actions evoked from public and private self-consciousness, They increase the feeling of self-heterogeneity in society (= lack of common sense). Next, from that perception, they give up self-fulfillment through activities such as studies and club activities or connection with general students (=student apathy), to be interested in delinquency to connect with students who are not familiar with society like self. Then, with the feeling (=sensation of seeking pleasure) such as "enjoying the place right now" against background, they find pleasure in connect with friends who deviated from school life and deepen delinquency.

KEY WORDS : Delinquency, Self-consciousness, University student, Reminiscence

* Master Course (School Education) ** School Education